

4. 学生グループ共同研究報告

奈良県下の観光資源の価値再発見調査 ～資源と人との関わりの観点から～

研究代表者：阿達 麗子

共同研究者：植田 拓仁・太田 恭平・尾野 妙・北野 正純・小林 太良・谷川 沙也加
坪倉 美紗綺・寺岡 強・永塚 夏美・福島 いち子

目 次

1. はじめに
2. 資源の抽出方法と研究手順
3. 調査・研究内容
4. まとめ

1. はじめに

奈良県観光公式サイト「なら旅ネット」では県内にある数多くの観光資源が紹介されている。奈良エリア150件、山の辺・明日香・橿原・宇陀エリア160件、生駒・信貴・斑鳩・葛城エリア140件、吉野路エリア151件の計601件の観光資源が確認できる（2019年1月25日時点）。どのエリアにおいても個性的な観光資源が多数登録されており、奈良県は豊かな観光資源の宝庫であるといえる。しかし、既存の観光資源に関する情報で、それぞれの価値を十分に説明できているのであろうか。

観光資源の大半は、その場所の自然とそれに関わる人の手によって生み出されたものと言え、関係する人々がその価値を見出し、資源の保全・活用を通じてその価値を保ち続けていると考える。これまでの観光資源の紹介では説明されていなかった、資源としての価値が見出された経緯、その後、その価値を維持、継承してきた人々との関わりを明らかにすることは、資源を見る視点として重要であると同時に、資源についての新たな見方を示す材料となる可能性がある。本研究では、以上のような認識に立ち、調査対象地について、資源と人との関わりの観点から特筆すべき点を見出すとともに、それを効果的に伝える試みを行うことを目的とする。

2. 資源の抽出方法と研究手順

奈良県内の観光資源が網羅されており、年々新しい更新されている「なら旅ネット」の登録対象地一覧のうち、資源と自然、人との関わりが比較的薄いと考えられる「美術・博物館」を除き、各資源の特性に基づき10項目に分類した。その上で各項目の中から資源を抽出し、調査対象とした。表1に、類型及びそれに属する調査対象を記す。各自、選定した対象地が観光資源として価値づけられた経緯と、その資源の価値がどのように維持されてきたのかについて、主に文献調査を行った。それを踏まえ、その資源について人との関

わりの中で検討すべきテーマを各資源に対し設定し、調査を進めた。現地調査、図書館等での文献調査を行うとともに、参考事例として、滋賀県彦根市での現地調査も行った。その上で、テーマに基づき明らかにした各資源の価値に関することがらをまとめた。

表1：類型及びそれに属する調査対象地

番号	類型	対象
①	庭園	依水園（奈良市）
②	公園	浮見堂（奈良市）
③	花・紅葉の名所	月ヶ瀬梅溪（奈良市）・龍田川（斑鳩町）
④	河川・溪谷	月ヶ瀬梅溪（奈良市）・龍田川（斑鳩町）
⑤	山岳・丘陵	三輪山（桜井市）
⑥	高原	曾爾高原（曾爾村）
⑦	社寺境内	宇太水分神社（宇陀市）・三輪山（桜井市）
⑧	史跡・旧跡	平城宮跡（奈良市）・郡山城跡（大和郡山市）
⑨	旧街道・古道	暗峠・暗越奈良街道（生駒市）
⑩	集落・街	今井町（橿原市）

3. 調査・研究内容

各資源について設定したテーマとそれについての考察をまとめる。

① 依水園

テーマ：依水園は借景庭園と言えるのか 研究者：坪倉美紗綺

「借景」に関しては様々な定義がなされているが、1920年代から現代に至るまで比較的論者が多い、借景は庭園の主景であるべきとする「主景論」に沿って検討を行った。ガイドブックを遡ったところ、1980年代の交通公社出版の『新日本ガイド』では「借景」については触れられていない。一方、県内の慈光院の庭園は「借景庭園」として紹介されている。現在、奈良公園の公式ホームページでは依水園について、「後園は東大寺南大門と若草山・春日山・御蓋山を取り入れた借景庭園」と紹介されている。西沢文隆の『庭園論1』（1975）での「借りてきた景が主賓になる」という借景の定義からみると、依水園は若草山、春日山、東大寺南大門の景を主としているわけではない。また、上原敬二の『日本式庭園』（1962）での借景の考え方に照らしても、依水園庭園は借景により成り立っている庭園とは言い難い。依水園は一般的に「借景庭園」として知られているが、それは世間一般で持たれているイメージであるといえるのかもしれない。どのような経過でいつの時点で借景しているとされ、「借景庭園」として紹介されるようになったのだろうか。

② 浮見堂

テーマ：浮見堂は景観に溶け込んでいるか 研究者：谷川沙也加

奈良公園の浮見堂は1916年に設置され、当時の報道から、建設当初は「浮御堂」と呼ばれ、春夏秋冬の自然の変化を楽しみ、鹿や虫の声を聴くことにも適した場所として設置されたことが確認される。全国には7か所の浮見堂・浮御堂が確認されるが、最も古いもの

は琵琶湖・堅田の浮御堂で建築年は995年から999年といわれる。堅田の「浮御堂」には阿弥陀如来像が安置されている。一方で「浮見堂」とされるものはお堂から外を見る建築物として設置管理され、観光用としての目的が大きく、表記の違いは建物の設置目的の捉え方の違いによると考えられる。奈良公園の浮見堂は当初は「浮御堂」とされていたが変化している。

水上に建物がある風景は、最古の堅田の浮御堂が近江八景で紹介されていたことから、水上に寺の建築で用いられる「宝形造り」の屋根をもつ堂が建つ風景は多くの人に知られていた。そのため、鷺池をはじめその他の地域であっても水上のお堂は違和感なく、景観の一部として容易に受け入れられたのだろう。気仙沼の例のように災害によって消失した浮見堂の再建が進められるのも、地域のシンボルとしてその風景が多くの人に親しまれているためではないだろうか。

③ 月ヶ瀬梅溪

テーマ：月ヶ瀬梅溪を評価する視点場に変化はあるのか 研究者：植田拓仁

月ヶ瀬梅溪は古くから多くの人によって評価され、価値づけられてきた場所であり、「一目千本」・「一目万本」・「一目八景」といった眺望が美しいとされる視点場も定められてきた。昭和初期までの月ヶ瀬を紹介するガイドブックではこれらの視点場が紹介されている一方、近年のものにはこれらの視点場を掲載しているものはほとんど見受けられない。月ヶ瀬を評価する視点場は時代とともにどのように変化してきたのか検討したところ、「一目千本」は明治時代頃から、「一目万本」は大正から昭和初期にかけて評価されるようになり、「一目八景」は「一目万本」と入れ替わるように昭和初期から評価されるようになっていく。評価される視点場は梅と溪谷の組み合わせがより美しく画像に残せる場所へと時代とともに変化していったと考えられる。その背景には名所の案内が和歌や漢詩によるものから絵葉書や画像をともなった案内書が中心となっていったことと関連があると考えられる。

④ 龍田川

テーマ：龍田川はなぜ奈良を代表する紅葉の名所ではなくなったのか 研究者：阿達麗子

和歌に歌われた紅葉の名所として広く知られる龍田川。明治後期から昭和初期にかけて出版されたガイドブックなどには「昔から名高い紅葉の名所」として数多く掲載されている一方で、現在は奈良や関西圏を紹介した紅葉の名所紹介から影を潜めつつある。紅葉の名所としての龍田川の最大の特徴は、想像上の紅葉の名所を人が一から作り出した点である。寛永年間に植樹が行われたとの記述があり、明治中期に近隣住民により植樹が行われ、紅葉の名所として一定の評価を受けるようになる。しかし、紅葉の名所としての価値を大きく左右した要因一つとして1980年代に行われた河川改修の影響が挙げられる。この工事により川と紅葉との間に大きく距離が開いた。さらに植栽されたモミジがまばらであることなどから、現在は水面にモミジが浮かぶ光景とは程遠くなっている。龍田川の独自性である、自然由来のものとは異なる人が手を加えたからこそ出せる「美」をいかに見出しているかが、今後も評価される紅葉の名所として存続し続けられるかの一つの重要なポイント

ントになるのではないだろうか。

⑤ 三輪山

テーマ：三輪山と山辺の道はなぜ価値を転換させたのか 研究者：太田恭平

三輪山を起点としてのびる山辺の道に沿って広がる遺跡や古墳群から、三輪山が古代、政治権力の中心として機能していたことがわかる。しかし、その後山辺の道は失われ、三輪山を中心とした政治体制も受け継がれることはなかった。山辺の道に代わって官道である上ツ道・中ツ道・下ツ道といった街道が重要性を帯びてくるが、それは、三輪山の持つ価値や権威が変化した過程とも考えられる。このような三輪山と山辺の道の価値転換には、国家として中央集権化を果たした天皇家の政治権力が大きく影響を及ぼしたと考えられる。天武天皇が行った伊勢神宮を中心とする国家神道の形成により、7世紀半ば頃には三輪山の象徴性は失われた。また、山辺の道は国家事業として敷設された上ツ道に対して、利便性という面も含めて幹線道路としての位置を占めることはできなかった。天皇家とそれ以前に存在していた勢力との関係性を検討する上で、権力の象徴となっていた三輪山の価値の転換は着目する必要は高いといえるだろう。

⑥ 曾爾高原

テーマ：曾爾高原のススキはいつから評価されるようになったのか 研究者：小林太良

曾爾高原のススキが文献の上で特記され始めたのは1971年以降のことであることが確認された。それまでの文献においては、ハイキングコース紹介の中で曾爾高原が取り上げられていたが、ススキについては明記されておらず、現在のように見るべきものとしてススキが価値づけられていたわけではなかったと考えられる。

曾爾高原は1970年に室生赤目青山国定公園に指定され、観光客が増加したという記述がみられ、このことから、国定公園の指定が一つのきっかけとなって曾爾高原への人々の関心が高まり、高原に広がるススキに対する関心も高まっていったのではないだろうか。その後、1980年に曾爾少年自然の家が開設されたこともあり、今のようなススキの名所となったと考えられる。

⑦ 宇太水分神社

テーマ：宇太水分神社の秋祭りに参加する集落はどこか 研究者：尾野妙

宇太水分神社では、毎年10月の第3月曜日に秋祭りが開催されており、この祭りは平安時代から続いているという。1200年という長い歴史の中でこの祭りに何らかの形で参加する周辺地域（「祭祀圏」とする）に変化がみられる。中世後期には宇太水分神社中社を中心としながら、一部下社付近にまで祭祀圏が及んでおり、上社・中社のある宇太町・宇賀志村（以下、町村名は昭和25年時点での旧町村名）のほか、伊那佐村・大宇陀町・室生村・内牧村・榛原町にまで広域の祭祀圏が確認できた。江戸後期には室生村や榛原町などの範囲が縮小し、1993年には市町村合併等の影響もあり、伊那佐村・内牧村が不参加となっており、大宇陀町も中社から距離がある位置関係の集落ははずれ、実質ほぼ宇太町と宇賀志村の範囲となっている。現在、全体的に祭祀圏は縮小しているが、中世の上社・中社の社

領域（荘園）に限定してみれば、現在の祭祀圏の範囲と重なっている部分が多く、中世の関係性が今まで長く神社との関係に影響を及ぼしている。

⑧ 平城宮跡

テーマ：平城宮跡の復原は観光に効果があったのか 研究者：福島いち子

旅行雑誌「るぶ」における平城宮跡の掲載、紹介の経緯を見ることにより復原の観光面での影響を検討した。1970年代には資料館や遺構展示館が開園されているが、1991～92年版のものには地図上で表記されているのみで観光資源としての紹介にはいたっていない。朱雀門の復原が進められる段階から掲載は増え始め、1998年の朱雀門・東院庭園の復原、ユネスコ世界遺産への登録以降は、写真の掲載も増え、復原箇所だけでなく発掘箇所も簡単に紹介されるようになる。2010年の平城遷都1300年祭とそれに合わせて復原された第一次大極殿の整備を契機に平城宮跡の紹介量が大きく増加し、それ以降平城宮跡に焦点が当てられた紹介がなされている。このように一連の復原は、個々の点としての復原施設の紹介にとどまらず、面としての平城宮跡全体の記事を増やすことにつながり、平城宮跡の観光資源としての紹介に一定程度効果を与えたといえる。

⑨ 郡山城跡

テーマ：郡山城跡は桜の名所であり続けられるか 研究者：北野正純

大和郡山市によると、郡山城の桜は1724年柳沢吉里が入城した際に多くの桜を補植したことからはじまったとされている。その後も補植作業は行われていたものの、現在老木化や病気進行などにより伐採が検討される個所が出てきている。現在桜の撮影スポットとして有名な「追手向櫓の桜」や「追手東隅櫓の桜」では老衰古木が多いことが確認され、枯れたり伐採される時期が来ると桜の風景に大きな変化をもたらすことになる。

長期にわたり、桜の名所を維持していくことは容易ではないが、植樹する時期と場所に配慮することで、一斉に老木になり、伐採しなければならない事態を避けることができるであろうし、植樹場所に間隔をあけることで、その後植樹する場所が確保できるであろう。また、計画的な植栽といった長期的な取り組みとともに、郡山城跡桜保存会によって行われている消毒などの日常的な活動を中心に少しでも多くの桜を健康に長生きさせていくことが重要である。

⑩ 暗峠・暗越奈良街道

テーマ：暗峠・暗越奈良街道の現在の価値とは、何であるのか 研究者：寺岡強

暗峠・暗越奈良街道は、大阪と奈良を結ぶ最短経路として古くから多くの人に活用されてきたが、明治以降、鉄道や他の道路の整備が進み、安全性や快適性に劣るこの街道の利用は減少していった。本来の用途での利用が減った街道の現在の価値はどこに見いだせるのだろうか。1961年、1985年、2008年の空中写真を比較する中で、40年の間に街道周辺に広がっていた棚田が耕作放棄地となり、しだいに姿を消してしまっていることが確認された。しかし、そんな中でも奈良方面に街道を進む人々が最も目にしやすい地点においては現在まで棚田が維持されている。この地区では2003年に棚田を保全するボランティアが発

足し、維持活動が推進されている。この付近はまた、生駒市観光協会のホームページ上にハイキングコースとして紹介されている。街道周辺の棚田を保全する試みがなされることで、棚田と街道を一体のものとして捉えた新たな価値が生み出されているのではないだろうか。

⑪ 今井町

テーマ：今井町の重伝建選定になぜ時間がかかったのか 研究者：永塚夏美

重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の制度ができる以前、有松・今井・妻籠の3つの住民団体が集まって「町並み保存連盟」が1974年に結成された。しかし、その後のそれぞれの重伝建選定の時期はかなり異なる。今井町と妻籠宿を比較し、今井町の重伝建選定に時間を要した背景を検討した。今井町の選定期を妻籠より大いに遅らせてしまった要因は2点挙げられるだろう。今井町では、大阪・京都へのアクセスが便利な立地にあり、専門家の意見により町並み保存の議論が始まっている。一方、妻籠は交通の要衝としての地位が低下し、人口減少の中で、宿場町の存続対策として町並み保存が検討された。この保存に至る背景の違いが一つの要因である。また、妻籠では1970年頃から行政と住民が一体となって活動し始めていたことに対し、今井町では1980年代からであったことがもう一つの要因と考えられる。妻籠宿と比較する中で、町並み保存においては、行政と住民が一体となって活動を進めて

いくこと、何より住民の思いが重要であると考え

4. まとめ

このように、共同研究者はそれぞれ、奈良県内の観光資源を調査対象として1箇所選択し、文献調査を中心に、その対象が観光資源として価値づけられた経緯や、その資源の価値を人々がどのように維持、継承してきたのかについて明らかにした。そして、これを伝える試みとして、「景観マネジメント的ならガイド」の作成を行った。一方で、その作業を通して、NHKの番組「ブラタモリ」が

月ヶ瀬梅溪を評価する視点場に変化はあるのか？

月ヶ瀬梅溪は古くから多くの人によって評価され、価値づけられた場所である。さらに、月ヶ瀬梅溪には一目千本や一目万本、一目八景といった眺望が美しい場所（視点場）がある。しかし、現代出版されているガイドブックでは月ヶ瀬梅溪を取り上げたものは少なく、視点場を紹介しているものもあまり見受けられない。このことから、月ヶ瀬梅溪に存在する視点場（一目千本・一目万本・一目八景）は時代とともにどのように評価されてきたのかについて、見ていきたい。

まず、月ヶ瀬梅溪が評価されてきた特徴として、①名張川とその一帯の山々によって生み出された溪谷、②その山々に植えられた梅の花、の2つが挙げられる。そして、この2つが重なることで、独特の風景を生み出し、多くの人々から評価されるようになったと考えられる。さらに、大正・昭和時代出版の書籍の記載から、月ヶ瀬梅溪は名張川を中心に形成された溪谷を背景として、その手前に梅の花が広がる風景が特に評価されていたことがわかり、この構図で撮影された写真が書籍によく掲載されている。

書籍で掲載された写真



出所：『日本名勝旧蹟産業写真集 近畿地方之部』



出所：『月瀬案内』

このことを踏まえ、月ヶ瀬梅溪を評価する視点場の変化について見ていく。

月ヶ瀬を紹介した1800年代から1938（昭和13）年までの16点の書籍類において、代表的な視点場（一目千本、一目万本、一目八景等）が記載されているかを検討した（表1）。

一目千本



明治時代頃の書籍において、月ヶ瀬梅溪が

図1：とりまとめた「景観マネジメント的ならガイド」の内容（月ヶ瀬梅溪の一部）

この観点で資源を紹介していることに気づき、資源の背景を踏まえてその場所を訪れることで、その資源に対する新たな価値が見出せるかについて、共同研究者が事前に情報を持っていなかった彦根城とその周辺地域を訪れ、資源の背景を知ることの効果を検討した。

各対象地の調査とガイド作成では、観光資源として評価される場所は様々な人々がその場所に関わり、影響を与えることで変化してきたことが明らかとなった。この調査で取り上げた対象地はそれぞれ、その地域の自然を背景にした人々の営みによって生まれ、継承されてきた資源である。その資源を見出し、継承に関わった行政、地域住民、メディアなど多くの人々が様々なアプローチで資源に関わることで、資源自体の価値が見出され、変化していき、そのような人との関わりに資源に対する新たな見方を示す可能性が見いだせるのではなかろうか。

滋賀県彦根市の調査を通して、資源に関する歴史や人々の関わりについて知った上でその場所を訪れることで、資源の価値の認識がより高まることが感じられた。番組で紹介された、彦根城の南側にある足軽屋敷周辺に関する町の成り立ちや土地の変化についての情報を知らずに訪れることと、知った上で訪れることとは、その資源の価値の伝わり方に大きな違いがあると実感した。また、事前に番組内容を理解し訪れると、番組では直接紹介されていなかった、彦根城に残る様々な建物、また城周辺の街並みなどについても新たな発見があり、資源の価値について理解がより深まるきっかけとなった。

本研究において、奈良県内の各観光資源について人との関わりの観点で調査し、資源に対する新たな見かたとしてまとめ、参考事例として「ブラタモリ」を取り上げ、資源の紹介方法を考察した。これらを踏まえて、本研究での成果と課題についてまとめる。

成果として、奈良県内の各観光資源について調査することで、その資源の価値はどのような点にあるのか、またその価値を高めているものは何か、について見直す機会となった。そして、こうした価値は人々が資源に対して様々な角度から働きかけることによって生まれ、変化していき、そのこと自体が資源に関わる情報として重要であることがわかった。また、調査内容をもとにガイドを作成することを通して、調査で明らかとなった内容を効果的に伝える方法として、図表や写真、地図などを用い、視覚的に伝えることで理解が進むことがわかった。

一方、本研究で作成したガイドの内容をもとに現地を巡ることができる資源と、できないもののばらつきが出ている。どの資源についてもその価値について独自の視点から述べたものである。しかし、「ブラタモリ」のようにこれを見ることで、その資源の本質的価値がわかり、なおかつその場所を巡ることもできる、という2つの要素を兼ね備えたガイドとなっているとは言い難い。参考事例として「ブラタモリ」で実際に紹介された場所を訪れ、その効果を実感し、検討できたことは非常に有意義なものであった。

本研究では各資源の価値を新たな視点で見出すことができたが、ガイド作成については、それをもとに取り上げた資源を実際に巡ることで、資源に対する理解を深めることができるようなものを作りたいと感じた。

<参考文献等>

奈良県観光公式サイト「なら旅ネット」<http://yamatoji.nara-kankou.or.jp> (2019.1.25取得)

NHK タモリのブラブラ足跡マップ #93彦根 <https://www.nhk.or.jp/buratamori/map/list93/index.html>

(2019.1.25取得)

※ 各資源の研究内容に関する参考文献等は、奈良県立大学地域創造学部観光創造commons
景観マネジメント分野2018年度3回生編(2019)「景観マネジメント的 ならガイド」を参
照